

巻頭言

中部大学 80 周年史における生物機能開発研究所の位置付けと最近の 10 年の歩み

生物機能開発研究所は、人類が直面している食糧・環境・健康を取り巻く諸問題の解決に貢献しうる教育研究を担う全国的にもユニークな学部として、従前の農学部とは異なり、理学、農学、工学、薬学等を横断した教育研究組織としての「応用生物学部」の開設を研究面からサポート・推進する目的のもとに平成 12 年 4 月に開設された。最近十年の歩みについて、研究所の主なプロジェクト活動であるライフサイエンスフォーラム、研究所講演会、大型外部資金獲得を目指すプロジェクト研究等の観点から振り返ると、先ず生命健康科学研究所との共催であるライフサイエンスフォーラムについては、ほぼ毎年開催され、そのテーマ領域は、微生物(7)、植物(5)、ケミカルバイオロジー(3)、動物(2)、ゲノミクス(2)、ライフサイエンス(2)、健康(2)等非常に幅広い領域の世界的研究者を招聘して展開され、また、研究所主催講演会はこの 10 年間で計 31 回(年平均 3 回のペースで)国内外から最前線において活躍されている研究者による最先端技術に関する情報を提供する場となり、研究所にとどまることなく学部全般に至るまで最新情報を提供し、共有化できる場の役割を十二分に果たしてきたといえる。

次に、大型外部資金の獲得を目指した研究所独自のプロジェクト研究に関しては、この 10 年間で計 57 研究テーマ、104 名の研究者が果敢に取り組み、その研究成果を背景に文部科学省の大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム採択事業や私立大学戦略的研究基盤形成支援事業等の大型事業採択に大きく貢献してきている。

また、平成 29 年度より大学院の強化策の一環として大学院生の活性化を目的とした「大学院特別研究補佐員制度」が展開されており、この研究プロジェクトの成果として大学院生の研究水準の飛躍が期待される場所である。17 年度より開設された寄附部門「健康食品科学(平成 19 年よりフランク・E・アーティス記念健康食品科学と改称)」は既に 13 年を迎えて前述の生活習慣病関連研究に加えて世界的権威のスキンケア研究者を客員教授として招聘してシミ・ソバカスやシワの予防といった女性にとっての最大関心事であるスキンケアに関する研究を精力的に推進しており、大学受験者や入学者の女性の比率のアップの一助ともなっている。

食品環境創造研究センターは近隣の他大学に例を見ない食糧供給の各段階を代表するモデル実験研究施設である植物工場・食品プラント・給食管理実習室を横断的につなぐ研究として、植物工場で栽培する食材の食品への加工と調理食としての提供をめざす教育研究プロジェクトとして平成 30 年度には春日井市の名産であるサボテンを使ってサボテンを練り込んだうどん、クッキー及びサボテンの漬物の食品開発を試みて「サボテン試食会」を開催した。

2019 年 3 月 3 日

生物機能開発研究所

所長 塚本義則